

# 2016年

## 秋の課題作文優秀作品

### 【小学部】

十日市場校 K・Nさん（十日市場小）

私はドーピングに反対だ。なぜなら、スポーツ界がドーピングを完全に否定しているように、アンフェアだと思うからだ。

私は今、水泳を習い選手コースで泳いでいる。夏休みも毎日練習に行った。長時間の苦しい練習で、仲間とは励まし合い、助け合った。そうやって体力と精神力が養われていくのだと思う。しかし、大会ではみんながライバルだ。

私はまだメダルを獲ったことがなく、負けたくないと思うし、できれば入賞したいいつも思っている。でも、アンフェアな戦いで勝ち取るメダルは美しくなく、欲しくもない。だからドーピングには反対なのである。

最近の私は、思うように体が動かなかったり、足が痛くてうまく泳げないことがある。それは成長の過程で起こることだと病院の先生や母にも言われた。大会で新記録を出す選手も、私と同じように悩みながら練習を積んできたのかもしれないし、今も悩みながら練習をしているのかもしれない。

どんなスポーツでも、見えないところに大きな努力があるのだと思う。それだけで、とても価値のあるものだから、メダルで選手の価値を決めるのではなく、選手個人に目を向けていく世の中になれば、ドーピングもなくなっていくのではないかと考える。東京五輪では、素晴らしいスポーツマンシップが見られることを期待し、私も自分の力だけを信じて頑張っていきたいと思っている。

### 【中学部】

十日市場校 E・Rくん（霧が丘中）

現代社会においてスポーツは、世界中で普及し、広く親しまれている。そんなスポーツのイベントの中でも、最も盛り上がるイベントといえば、オリンピック、パラリンピックだろう。2020年には東京で開催され、世界中が注目している。そんな中、今回テーマにしたのは、パラリンピックの創始者であるルートヴィヒ・グッドマンの言葉についてだ。「失われたものを数えるな。残されたものを最大限に生かせ。」そう彼は言った。この言葉に私は、自身の体験を交えることができた。

今年の春、サッカーのクラブチームに所属していた私は、いつものように試合へ行った。しかしその試合で私は、相手とぶつかり倒れた。ひざに激痛が走り、途中で抜けた私は、翌日に病院へ行った。しばらくして診断結果を知ると、数ヶ月はまともに動けないような状況であった。その後本意ながらクラブチームを引退し、今に至っている。私は時々、あのときこうしていたら、と悔やんでしまうことがある。しかし、過去のことに執着するのではなく、目の前にあることを大切にしなければいけないと思う。今どう考えても過去に失ったものが戻ってくることはない。だからこそ今に集中すべきだ。と自分に言い聞かせると、少し気持ちを前向きにすることができた。これと同じようにパラリンピックも、私のように時間が経てば治るようなものではなく、一生付き合っていかななくてはいけないような障害を持ちながらも、そのことをしっかり受け止め、自分にできることを見つけて、それに向かって日々努力をし、選手として競技を行っている。

今後の長い人生の中で、失っていくものは多いと思う。それは体のことだけでなく、気持ちなどもそうだ。生きていく限りなにも失わないという人はいないはずなので、失ったことの悲しみや悔しさといったエネルギーを、今すべきことに変換することが大切だと私は思う。

中山校 S・Yくん（中山中）

「オリンピック・パラリンピックは、勝つことではなく、参加することに意義がある。」これは、クーベルタン大主教の言葉だ。

リオオリンピック女子5000m予選。ニュージーランド選手とアメリカ選手が交錯し、転倒した。決勝進出をかけたレースから脱落した状況にも関わらず、互いに励まし合いながら、最後まで走り切った。私はこの時、本来あるべきオリンピック・パラリンピックの精神をそこに見た気がして、胸が熱くなった。

しかしその一方で、今回のオリンピック・パラリンピックでは多くの他国の選手がドーピングにより出場禁止となった。なぜ、不正とわかっていながらも、手を染めてしまうのだろうか。その背景として、国中に蔓延している歪んだナショナリズムがあるだろう。オリンピック・パラリンピックを、スポーツを、国威発揚という政治的な思惑に利用しているのだ。

そしてまた、マスコミ、国民の中にある極端な勝利至上主義も見過ごせない。努力を積み重ね、出場に至った過程よりも、メダルを獲得したという、結果が全てだとする風潮だ。それらの背景によって、選手たちは過度なプレッシャーを感じ、自信を失い、不正を犯してしまうのだろう。

では、ドーピングを撲滅するためには、どうすれば良いか。恐らく、国規模の政治的な思惑を私達に変える事は難しい。ならば、私達にできる事は何だろうか。それは、出場している選手全員に最大限の敬意を払う事だと思う。自国、他国関係なく、良いプレーには拍手を送り、挑戦する選手を応援しようではないか。

四年後、日本でオリンピック、パラリンピックが開催される。国力を世界中に誇示する場でも、ただ勝ち負けを競う場でもない、スポーツの国際交流を通じて、世界の平和を願う祭典になる事を私は期待している。

## II 特別賞 II

センター北校 T・Hさん（中川中）

東京オリンピック・パラリンピックが、四年後に開催されます。これは日本の歴史に刻まれる大きなできごととなるでしょう。

しかし、東京で開催されるにあたって、大きな問題があります。それは、首都直下型地震です。この地震が今後三十年の間に発生する確率は、なんと七十パーセントを超えています。しかも関東でのマグニチュード七クラスの地震はいつ起きてもおかしくないと言われています。もしもこのような地震が東京オリンピック・パラリンピック期間中に起こったら、と先読みをして事前に何をすべきか考えておく必要があります。そこで私は二つのしておくべきことを考えました。

一つ目は、事前に各国の代表に集ってもらい、防災に関する会議をしてもらうことです。ここでは、国ごとに避難場所を指定して、避難生活に必要な日用品、非常食を集めた防災セットを作ります。また、地震に関する知識を共有することで、代表者を通じて全ての選手の防災意識を高めることができると思います。

二つ目は、全員で避難訓練をすることです。日本では学校を始め地域ごとに行われますが、一切行わない国もあります。実際に、避難訓練を行うことで、そうした国の人でも流れをつかむことができ、もしもの時にスムーズに避難できるようなになると思います。

日本が以上のことを行うだけでも、たくさんの方の命を救えるのではないのでしょうか。幾度も起こる地震に真剣に向き合い乗り越えてきた日本なのだから、これら以外にもできることはたくさんあるはず。四年後の東京オリンピック・パラリンピックが世界中の人たちに安全かつ安心して楽しんでもらえるスポーツの祭典になって欲しいと思います。